

第2回長久手市地域包括ケア推進協議会 会議録	
開催日時	令和3年1月29日(金) 午後1時30分から午後3時05分まで
場 所	西庁舎3階研修室、オンライン併用
出席者氏名 (敬称略)	委 員 横井英臣、唐澤美穂 (オンライン参加) 田川佳代子、松永昌宏、野口一真、 横山智絵子、平井佳彦、小幡匡史、岡本悦子、 今野博伸、加藤みゆき、加藤圭子、近藤賢久、 松田豊 事務局 長寿課長 粕谷庸介、 長寿課長補佐兼地域支援係長 稲垣道生、 長寿課専門員 近藤小百合 (オンライン参加) 福祉部長 川本晋司、 福祉部次長 青木健一
欠席者氏名 (敬称略)	委 員 見田喜久夫
審議の概要	1 あいさつ 2 議題 本市の地域包括ケアの基本的な考え方について(案) 3 その他
公開・非公開の別	公開
傍聴者	0人
議事内容	別紙のとおり

1 あいさつ

田川会長

2 議題「本市の地域包括ケアの基本的な考え方について（案）」

（事務局：資料1・2に基づき説明）

会長：オンラインで実施していることもあり、お一人ずつご意見や感想をお聞きしたい。

委員：〈みらいスケッチ〉の考え方自体、幸せなイメージを持っていることが大事。包括ケアが何たるかをよく理解した上で作成されたものだと思う。幸せのイメージを考える訓練は大切であり、5年後の幸せは何か、という問いがあるが、非常に重要だと思う。

オランダの学者が作成した「ポジティブヘルスに関するアンケート」は、設問に答えて得点化し、レーダーチャートに落として健康状態のバランスを見るものである。選択式設問には答えられるものの、最後の設問にある「幸せになるために何を変えたいか」の自由記載欄には、みんな何も書けないのが現状。高齢者に限らず、幸せになるためのイメージというのはわかりづらいものなのかなと思う。同様に、〈みらいスケッチ〉も「さあやってください」と言っても、みなさんができるかどうかは、難しいのではないかと思う。話を聞ける人、例えば心理職などがいて実施するのがいいと思う。

委員：新型コロナへの対応で、みんなネガティブになりがち。医療従事者側としても、やらないといけないことが多すぎて、そこまでやれないのが現状かもしれない。〈みらいスケッチ〉は明るい材料であると感じた。

委員：資料2の3人のストーリー、興味深く見せていただいた。内科で話を聞いていくと、理想的に地域のことに活発に参加している方と、リタイアして家にいる人と、二極化していると思う。参加している人は近所で声を掛け合ったりもちゃんとできている。具合が悪くなる前に、元気なうちから、地域の活動、サークル活動等にうまく参加していたいて、繋がりを持っていただくことが大切と思う。

委員：資料1の「対象となる人の心を深く知ること」のページに「予防は意識の高い人しか取り組んでいない」とある。高齢になると、自分の健康に興味のない人はいないと思う。委員が見せてくれたアンケートに答えることはできても、最後の1行が書けないのはその通りと思う。行政が、表現できない高齢者の気持ちをどうくみ上げていくのか、それを考えていかないといけないと思う。誰しも健康が一番と思う。

委員：〈みらいスケッチ〉はいいものと思うが、委員が言ったように、自

分ではイメージできない、書けないというのが正直なところだと思う。自分が何ができるかを考えると、キーワードとしてはつながり合うということなんだろうなど。容易に情報を得られる場所だったり、調剤薬局も情報を得やすい場所、集う場所として利用してもらってもいいのかなと思った。

委員：多世代の方がつながり合えるというのは、他の委員と一緒に、いい意見だなと思う。そして、つながり合うためのツールとして〈みらいスケッチ〉というのは、可能性があることだと思うが、その分何に注力するかがカギになると思う。自分も高齢者と接する機会は多いが、変化しないといけないうきに行動に移せない高齢者が多いと感じる。手術や退院も、なかなか後押しがないと進めない。Dr やケアマネのサポートがあってこそ。〈みらいスケッチ〉にも、困っていることを共有することが大事と思う。高齢者は、明るい未来の想像よりも、現状を共感してもらうことで信頼することが多いとも思う。〈みらいスケッチ〉をどう使っていくかが課題と思う。

委員：自分が病気になったり弱った時のイメージを持つことは難しい。どうやってそのイメージを持ってもらうか、一元化して活用できるかの仕組みを考えていく必要があると思う。

スライド13の「丁寧で心地よいキャッチボール」、印象に残った。情報は、過剰な情報を必要なものだけ取り入れることが難しい、必要な情報をタイムリーに与えられて、うまくキャッチボールしていくことが大事と思う。

委員：自分は、昭和26年生まれ。団塊の世代がケアの中心に入ってきていると思う。老害などということも言われるようになり、悲しいが、戦後の世界を作ってきたことを自負している世代。スライドにある「対象となる人の心を深く知ること」。知らないと前へ進まない。団塊の世代は、自分たちでやってきただけに、話したがらないし、自分でやっていかないといけないと思っている。その気持ちを〈みらいスケッチ〉に生かしていただきたいと思う。

委員：皆さんの意見、共感して聞いていた。スライド5やカエルのイラスト、こころとからだとくらし、介護施設では全部兼ね備えている部分になる。暮らしを見守る中で、真ん中に幸せがあるということ、改めて感じた。今後リタイアされた方の役割などを考えると、サービスの提供だけではだめで、それらをつなげることが大事と思う。実際に施設を訪ねてこられた方に、リタイア後の役割を見つけるために施設に来てくれる方もある。役割がないと生きがいにつながらない。

委員：事務局からの説明について、いいなあと思って聞いていた。意見を聞きながら進めていくというところがいいと思う。3人のストーリー

一も、具体的でわかりやすくてよいと思う。地域で支え合うこととか、専門職がどう支えるかも書いてあって、わかりやすい。委員のポジティブヘルスのアンケートもすごくいいと思って見ていた。ケアマネは、困りごとを聞く仕事になりがち。ポジティブなことをアセスメントで聞くこともいいかと思う。引き出し方、丁寧に引き出すこと、そういうやり方していきたいと思った。Bさんのストーリーでは、40歳の息子が家事のスキルを身に付けていく仕組み、とある。若年層も含めることが本当の地域包括ケアと思う。全体の方向性は良いと思う。

委員：今年たまたま、あて職で委員になった。自分も団塊の世代。キャッチボールなどの考え方は、いいと思う。新聞記事で、認知症カフェが休止している等を目にした。現実的なことにも目を向けることが大事と思った。現実も見ながら計画を練った方がいい。

委員：自分も団塊の世代真ただ中。高齢者に対してどういう対応を、ということでこれから考えていただけることは、ありがたいと思う。人生70年、80年、それなりの経験を一人ひとり持っている。それぞれ専門分野は違う、とんがっている部分は違うので、話が通じない、高齢者同士でも、言い方は悪いが、すぐ喧嘩になってしまうところもあるかと思う。つながり、ということで、回数を重ねていけば、とんがった間柄も柔和になっていくと思うが、現実にはそういう場がない。共生ステーションも学区に1つしかないし、そこまで行くのも大変。避難所に行くのも大変という話も聞く。調剤薬局を集う場所にするという話も、いいなあと思い聞いていた。

委員：非常にわかりやすい資料だった。介護予防などのいろんな事業にも参加者が固定されてしまうと聞く。移動の問題や、一人ではちょっと行きにくい、ネットの利用が難しかったりなど、さまざまな事情がある。「何かのついで」で提供することができると、高齢者の行動も変わるのではないかと思う。

事務局：貴重なご意見をありがとうございます。5年後をイメージすることがみなさん難しいとか、いろんな世代の方の考えや情報から自分に合ったものを選ぶことが難しいとか、弱った時のイメージが難しいとか、等のご意見をいただいた。どのように心を通わせてアプローチしてくか、工夫を要すると思う。全員の方に気持ちよく書いていただけるようにするのは難しいと思う。一つの印刷物では難しいと思う。対話の中で一緒に聞き出していくような、まさにキャッチボールのプロセスが必要だと思う。ボタンの掛け違いが起こらないようにしながら、この草案の段階から、皆さんの意見を聞いていきたいと思う。

今は、ポジティブな話を中心に進めているが、現実には、コロナ

禍で日々悩みながら行動しているところだと思う。そういう中で今具体的に何をするのか、同時並行で考えていく必要がある。ゆっくりの部分と、今すぐに取り組むところと、同時並行でやっていきたい。引き続きこういう場で議論しながら、両輪を回しながら進めていきたいと思う。

会長：事務局は意欲的にやっていきたいとのこと。めざすところを決めて進めていく解決指向をとる。だが個人の自己実現は、どのような状況でも他者との協働が必要となる。現代社会では、互いの「わかりあえなさ」が付きまとい、様々な社会の分断が起きている。世代間の軋轢から、全世代型の社会保障がいわれてきた。専門職に対する市民の不信もある。行政と民間の間でも、介護と医療の連携の難しさでも。長年言われていても実現できないできた。庁内連携も難しい。でも、事務局は「やります」と意欲的である。横のつながりを主張するならば、縦割りの部分は行政自らが正して、地域での課題解決を提案していく必要がある。市がとるのはソフトなアプローチだが、ハードな部分を実質的に変えていく覚悟を、行政のトップから聞いてみたい。〈みらいスケッチ〉で、物足りなさを感じるのは、これが高齢者世代に限っていること。高齢者のみについて考えていては限界がある。全世代で考えないと先へつながらない。地域にはいろいろな人がいて地域なのであって、高齢者のことだけを考えても進まないのではないか。委員のみなさんが話されたことは、意義のあることで、前に進めていかないといけないと思う。

委員：自分は素人でただの高齢者だが、会長のような多様な意見が必要と思う。

委員：直近の課題として、高齢者がどんどん増えていく、ということで、高齢者にまず着目して進めていくというのは理解できる。

委員：全世代で共有できたらいいと思う。

委員：会長の意見も、共感できる。〈みらいスケッチ〉の考え方として、長久手市民が皆さんで使える掲示板のイメージを持っている。いろんな世代がアクセスできるもの。行政の中の変革も必要だと思うが、プラットフォームをどこに置くのかがカギになると思う。

委員：高齢者に子育て世代を助けてもらいたい、そのつなぎや、世代間のコミュニケーションを行政でやってもらいたいと思う。〈みらいスケッチ〉のやり方について、今の自分というのは、確実に、これまでの人間関係で構築されている。振り返ることは大事で、過去に目を向けて、未来を見ていかないとと思う。

事務局：さまざまなご意見をありがとうございます。会長からは、縦割り行政など、行政に耳の痛いお話もあった。今後は、重層的支援体制整備など、市民の気づきを拾って、キャンバスに落とすようなこと、

また、横の連携、気づいていく、つながっていくということを考えていきたいと思っている。〈みらいスケッチ〉はその一端。どう具体的に関わっていけるのか考えていきたいと思う。目を背けたいことも考えながら、未来に目を向けて、それを増幅し共有していく。みなさんにまたご議論いただければと思う。

委員：重層的支援体制整備の話もあった。ケアマネとして世帯に入っていくと、高齢者のことで初めは関わるのだが、引きこもりなど、いろんな世代のことに関わっていくことになる。それぞれの部署でキャッチしたことを、必ず横につないでいくという意識を長久手市が目指していると聞いている。ここでは、高齢者の幸せから考えてはいるが、高齢者だけにはとどまらないと感じている。

会長：〈みらいスケッチ〉は、プラットフォーム、白いキャンバスであると思う。ここに集まっている人は、医療や介護を中心とした専門職と地域の代表の方々に、これだけだと非常に限られていると思う。長久手市には芸大もある。アートや歴史文化に結び付いたもの、医療介護だけにとどまらないアプローチの仕方。プラットフォームが博物館のようなイメージで、土台として幅広いと楽しいだろう。文化、芸術が非常に大事だと思う。ポジティブヘルスのアンケートの例で、文字では未来が書けなかった方でも、違う方法なら表現できるかもしれない。写真や絵など、別の形で思いを表現できるようなプラットフォームにしてみるのも一つの考え方と思う。

事務局：高齢者という部分から、この議論はスタートしたが、誰もが高齢者になるということで、幅広い世代から考えることができると思っている、ICTなどの技術をどのように活用するのか、どう伝え、波及していくのか、委員のみなさんの意見をお伺いしながら思った。協議会以外の方にも意見を聞き、それを踏まえて、より良い形になるように作り続けていきたいと思う。

事務局：追加のご意見については、アンケート形式で会議後に頂戴したい

会長：以上で、本日の会議を終了する。